

故守屋敦子さんに捧げる曲がCDになって発売されています

記 2009.5.22 磯野 昭彦

実は、2007年に亡くなられました同期守屋敦子さん(左写真)のお姉さま沢柳(旧姓守屋)友子様(昭29)とひ



よんなことで知り合いになり、お話をしていたら更にお兄さまの守屋一彦様(昭27)のお嬢様がジャズピアニスト守屋純子様(戸山卒業ではありません)であることがわかりました。守屋純子様は、早稲田大学ハイソサイエティオーケストラ(フルバンド)でジャズを始め、世界各地でライブ活動を展開中とのことです。その守屋純子さんが今年の1月21日発売したCD「グルーヴィン・フワード／守屋純子オーケストラ」の9曲目が、守屋敦子さんに捧げて書いた曲なのです。そのCDのジャケット、折込目次(曲目紹介)を、ここに紹介いたします。 以上

グルーヴィン・フワード
守屋純子オーケストラ

1. グルーヴィン・フワード
2. スカイスクレイパー
3. レイト・サマー
4. ワン・フォー・ザ・MPCA
5. フェアウエル
6. ウェル・ユー・ニードン
7. マイナー・ワルツ
8. ビューティフル・ラブ
9. サウザンド・クレインズ
10. ディス・イズ・フォー・サミー

好評発売中
JUNKO MORIYA
PLAYGROUND
JUNKO MORIYA SEXTET
SOL JP-0004

4 562263 550068

COMPACT disc DIGITAL AUDIO

このCDは、権利者の許諾なく複製・転載に使用すること、個人的な範囲を超える使用目的で複製すること、ネットワークを通じてCDに収録された音を送信できる状態にすることを禁じます。

発売：(株)スパイスオブライフ
Spice of Life Inc.
www.spiceoflife.co.jp

SOL JP-0009
税込価格：2,000円
09-7-20まで



9 サウザンド・クレインズ

2007年の秋、70歳で叔母が亡くなりました。彼女は教師だったのですが、50歳を過ぎてからオーストラリアの片田舎の学校に自ら志願して教えに行き、日本人などひとりもないような土地で、日本では忘れられかけている“Sadako And A Thousand Paper Cranes (禎子と千羽鶴)”という本が読み継がれていることにショックを受けたそうです。帰国後、日本でこの本を復刊するために、教職を辞して出版社を立ち上げ、平和の大切さを伝える本を、数冊世に出したところでした。いつもわたしの活動を応援してくれていた、彼女に捧げて書いた曲です。



1 グルーヴィン・フォワード

ジャズには色々な要素がありますが、最終的には常に前に向かってスイングしている、ということが一番大切だと最近強く考えています。同様に、人生もいつも良い事ばかりではなく、年齢と共に辛い事、大変なことも多くなって来ますが、後ろは振り返らずにいつも前向きに生きていきたいですね。そういう気持ちこめて、最初から最後までひたすらストレートにスイングし続ける曲を書きました。

2 スカイスクレイパー

都会の空に高くそびえる摩天楼の冷たく無機質な感じを描写した曲です。このCDの中では最もコンボ的な要素が強く、テナーサクソとアルトサクソ、トロンボーン、白熱したソロとアンサンブルが交互に表れます。そのくっきりとした対比の面白さを感じていただければ幸いです。

3 レイト・サマー

この曲は録音(9月初め)の直前に書きました。つまり、書いた季節からつけたタイトルではあるのですが、

エリック・ミヤシロのフリーゲルホーン、宮本大路のバリトンサクソの音色と相まって、夏の終わりのちょっとの悲しい気だるい気分がうまうま出せてはいないかと思っています。

4 ワン・フォー・ザ・MPCA

2005年、「Points Of Departure」に対して、第18回日本ミュージック・ペンクラブ・アワード(ポピュラー録音部門)をいただきました。これは日本の音楽評論家の団体が、その年の最も優れたCDを投票で決めるというもので、賞にも色々な種類がありますが、日々音楽に接していらっしゃる評論家の方々から選んでいただくというのは、大変に名誉なことです。わたしの大好きなビッグバンドのアルバムにジョルジュ・グリンツの「First Prize」(1989年、ENJA)というアルバムがあるのですが、このタイトルも、88年に同賞を受賞した(この時は録音ではなく、彼らの日本公演に対しての賞)ことに感激してつけたのだそうです。そこでわたしも賞をいただいた記念曲を書いてみました。変拍子が多く、多分このCD一番の難曲ですが、わたしの考える「ビッグバンドらしさ」をふんたんに盛り込んだつもりです。

5 フェアウエル

2008年2月29日に、元東京ユニオンのリーダー、テナーサクソ奏者の高橋達也さんが亡くなりました。わたしとしては、学生ビッグバンド時代から20年以上にわたり大変お世話になった方で、今までCD収録の際には、まず高橋さんのところに相談に行き、いつも本当に親身で的確なアドバイスをいただけてきました。

晩年は入退院をくり返されていましたが、サクソを吹きたい一心で毎朝奇跡の復活をとげられ、そのたびに演奏に深みと凄味が加わっていく様子には、

真のミュージシャン魂の何たるかを感じさせられたものです。

高橋さんは、生前小池さんのことを「日本にもこんな凄いテナープレイヤーがいるんだね」と高く評価されていました。その小池修をフィーチャーし、高橋さんを偲んで書いた曲です。今後高橋さんのいない世の中で音楽活動を続けていくのは辛いことですが、いつも必ずどこかで見て下さる、と確信しています。

6 ウェル・ユー・ニードゥント

普段このバンドでは、わたしのオリジナル曲を中心に演奏していますが、有名なあの曲がこんな風になるんだ、という驚きもビッグバンドの大きな醍醐味のひとつだとも思います。これは、セロニアス・モンクの中でも特によくとりあげられる曲で、ビッグバンドのアレンジもたくさんあります。

既成の曲をアレンジする場合、普通はハーモニーとリズムを変え、メロディーはあまりいじらないことが多いのですが、ここでは細かい転調によって、メロディーを大胆に変化させています。この曲があまりにも有名な曲であること、明確な構造のリフがあることなどからこのようなアレンジ手法が可能になったと思っています。

7 マイナー・ワルツ

この曲はタイトルのとおり、ちょっと哀愁を帯びたメロディーを持つマイナーのワルツです。

8 ビューティフル・ラブ

わたしはジャズとクラシックの融合に興味があり、今までのCDにもスタンダード曲にシロノやドビュッシーの手法を取り入れたソロピアノの演奏を入れてきました。

今回は、全ての音楽の原点ともいえる、バッハのスタイルでジャズ・スタンダードをアレンジしました。このアレンジは4声で書いたのですが、一度に4本のホリゾンタルなラインを書くのは、テクニク的に大変難しかったです。

9 サウンド・クレインズ

2007年の秋、70歳で祖母が亡くなりました。彼女は教師だったのですが、50歳を過ぎてからオーストラリアの片田舎の学校に自ら志願して教えに行き、日本人などひとりもないような土地で、日本では忘れられていた「Sadako And A Thousand Paper Cranes(千羽鶴)」という本が読み残されていたことにショックを受けたそうです。帰国後、日本でこの本を復刊するために、教職を辞して出版社を立ち上げ、平和の大切さを伝える本を、数冊世に出したところでした。いつもわたしの切實な活動を応援してくれていた、彼女に捧げて書いた曲です。

10 ディス・イズ・フォー・サミー

2005年10月、エリック・ミヤシロ氏を通して、サミー・ネスティコ(カウント・ベイシー楽団の名作編曲家)と共演する、という夢のような機会をいただき、その時に彼から受けた印象を曲にしました。ネスティコ氏は、82歳にして初来日でしたが、とにかく純粋で全く飾り気のない、誰もが好きにならずにいられないような方でした。彼が書いた数々の美しいメロディーは、彼の素晴らしい人柄から来るものだったわけで、あれ以来「良いメロディーを書くためには、まず人間性を磨かなければならない」ということを痛感しています。

(文中一部敬称略)
守屋純子

「1」の曲は、わたしが高橋達也さんと一緒に録音した曲です。高橋さんは、生前小池さんのことを「日本にもこんな凄いテナープレイヤーがいるんだね」と高く評価されていました。その小池修をフィーチャーし、高橋さんを偲んで書いた曲です。今後高橋さんのいない世の中で音楽活動を続けていくのは辛いことですが、いつも必ずどこかで見て下さる、と確信しています。

「10」の曲は、わたしが高橋達也さんと一緒に録音した曲です。高橋さんは、生前小池さんのことを「日本にもこんな凄いテナープレイヤーがいるんだね」と高く評価されていました。その小池修をフィーチャーし、高橋さんを偲んで書いた曲です。今後高橋さんのいない世の中で音楽活動を続けていくのは辛いことですが、いつも必ずどこかで見て下さる、と確信しています。